

# 朝鮮の留学生の文学と日本文学の交渉

—〈白樺〉・〈学之光〉と羅蕙錫（ナ・ヘソク）—

明 恵 英

## Negotiations of Literature and the Japanese Literature of the Korean Foreign Student

<Sirakaba>, <Hakutigyung> and Hyesuk-Na

Myung Hye-yung

In the early days of 1910, 'Sirakaba', the group of literature was interested in Japanese literary trends because the Sirakaba grew out of naturalism and stood for humanitarianism and idealism. Their theory was spread by 'Sirakaba' the journal of literature in Japan. After that, the students from Korea studying abroad in Japan published the Korean journal 'Hakjigwang' inspired by Sirakaba, because they had huge agreement with the movement of Sirakaba where they spoke about the bad colonial situation of Korea. In this group, Seung gu Choi, who was the lover of Hyesuk Na and a poet of Korea, was in charge as chairman of editing and printing. After that, he published an essay 'revolutionize yourself' inspired by the theories of 'individuality', 'the self' and so on from Musanokoji Saneatz. On the other hand, Hyesuk Na who joined the group of students studying abroad with Kyungsuk Na, her older brother, fell in spiritual love with Seunggu Choi. In 1914, Hyesuk Na was fixing her aim in life as the first and best feminist of Korea by publishing 'the ideal lady' in the Korean journal Hakjigwang inspired by 'Cheongtop' the best journal for the Japanese female. However, Seunggu Choi asked Hyesuk Na to join in the regeneration of colonized Korea by publishing an essay 'the requirement of sentimental life'. In 1917, after Seunggu Choi died of phthisis, Hyesuk Na suggested to turn him into a nationalist by publishing an essay 'miscellaneous impressions' which was composed in two parts. After that, she determined the resuscitation of Korea by publishing a brief tale 'to granddaughter who comes to life again' and she participated in the campaign for the independence of Korea.

## 1. はじめに

1913年3月、進明（チンミョン）女子高等普通学校（現進明女子高等学校）を最優秀の成績で卒業し新聞を賑わした<sup>i</sup> 羅蕙錫は、同年4月、日本東京の私立女子美術学校（現女子美術大学）の西洋画科に入学した。それから1年後、大学で優秀な成績を収めたことで、再び『毎日新報』（1914. 4. 7）に取り上げられ、朝鮮出身の日本女子留学生の活躍として注目された。こうした世間の期待に沿うべく、彼女は、留学早々から日本の文芸界の変化と共に成長し、近代的女権論を書き記した『理想的婦人』（『学之光』第3号、1914.12）を発表するなど、いち早くフェミニストとしての資質を発揮し始めた。こうした彼女のフェミニストとしての資質は、母親の崔（チェ）シイからの影響が推測される。崔シイは、1908年12月、地元の水源（スオン）で教育と慈善を目的に婦人会を組織し、女性教育に励んだ経歴の持ち主である<sup>ii</sup>。

さて、留学時の羅蕙錫は主にフェミニストとしての顔を見せていたが、1917年に発表された二つの試論『雑感』を通してナショナリストとしての顔を見せ始める。羅蕙錫のフェミニストからナショナリストへの変身は、当時恋愛関係にあった崔承九からの影響がしばしば指摘されており、かつて拙著においてこのあたりについて述べており、本稿はその続編にあたる。

羅蕙錫が1917年発表した試論、二つの『雑感』を通じてナショナリストとしての心構えを披瀝していたとしたら、以後1918年の詩『光』（1918. 3）や小説『回生した孫娘へ』（1918. 9）を経て、ナショナリストとしての立志を果たしたことになる。なお、1919年3月、朝鮮で行われた「3・1独立万歳運動」では、出身学校に出向いてピラを配りながら独立運動への参加を呼びかけるなど、企画段階から携わっていた。こうした羅蕙錫の変貌には、ロマンチック・ラブのよき相手であった男子

留学生崔承九の影響が見受けられる。

崔承九（1892～1916. 2、雅号：素月）は、1910年日本に渡り、慶應義塾大学予科を終えて歴史学の勉強を目指したが、1916年4月肺結核で亡くなった不運の人である。しかし生前の彼は慶応大学の予科に在籍していたながら、1914年4月には「在日本東京朝鮮学生学友会」（以下、＜学友会＞）の機関誌『学之光』を創刊させており、編集・発行人を勤めるなど留学生会のリーダー的存在であった。

崔は、羅の兄の羅景錫とは交友関係にあり、後に彼から羅蕙錫を紹介される。後に、感性のあった二人は恋人関係に急速に発展したという。朝鮮の知識人の一人である崔南善（チョナムソン）は、崔承九の書いた詩を読んで賞賛を惜しまなかったほど前途有望な人物だった。

崔承九は、機関誌『学之光』（1914. 4～1930. 4、全20冊）に『情感的生活の要求』（『学之光』第3号、1914.12）、『南朝鮮の新婦』（『学之光』第3号、1914.12）、『あなた自身を革命せよ（Revolutionize yourself）』（『学之光』、1915. 5）、『不満と要求』（『学之光』、1915. 7）等の試論と、詩『ベルジオムの勇士』（『学之光』、1915.2）と、『長い熱視』（『近代思潮』、1916. 1、1915. 4.15作成）を発表するなど、詩1篇、試論4篇、未発表詩25篇を残している。

本稿では、羅蕙錫の詩『光』（『女子界』、1918. 3）や小説『回生した孫娘へ』（『女子界』、1918. 9）の2篇の作品と、崔承九の『情感的生活の要求—（私の更生）—（K.S兄に与える書）』（『学之光』第3号、1914.12）、以下『情感的生活の要求』、『あなた自身を革命せよ（Revolutionize yourself）』（『学之光』、1915. 5）等、武者小路実篤の『お目出度き人』（『白樺』、1911）を取り上げる。これらの作品の比較分析を通じて、武者小路と崔承九との影響関係、ひいては崔承九と羅蕙錫とのロマンチック・ラブによる恋愛関係が、ナショナリストとしての

彼女の思想形成にどう影響したかを明らかにしたい。

## 2. 羅蕙錫の思想形成とロマンチック・ラブ

近代に入って、一番といっても過言ではないくらいに大きく変わった風習は、ロマンチック・ラブによる結婚だった。このロマンチック・ラブは、恋愛至上主義を誕生させ、前近代の結婚風習とはまるで違った文化を生み出した。それは、男性はもちろんのこと、女性も新教育を受けたエリート女性たちを中心に実践される一方、男女間の霊性的交感が求められた。

1913年4月、羅蕙錫の留学当時から＜学友会＞では羅蕙錫と崔承九のロマンチックラブが大きな話題になっていた。二人もさっそくロマンチックラブを実践しながら、女権問題や民族運動等々を話題にした手紙をやり取りし、霊的交感を分かち合っていた<sup>iii</sup>。ところで、ロマンチック・ラブの完成は結婚にあったため、二人も当然結婚を求めている。しかし、崔承九には早婚による妻がいたため、二人の関係は世の中に公表できず、叶わぬ恋に終わる運命であった。当時の知識人男性たちの大多数がこうした早婚文化による悩みを抱えていた。従弟の崔承万によると、崔承九は結婚している女性とは一度も夫婦としての生活をしていないという<sup>iv</sup>。幼くして親を失った崔承九は、叔父の世話を受けて育っており、叔父は父のような存在であった。その叔父から妻との離婚を反対される反面、羅蕙錫は妾として受け入れるようにと強要され、深く悩んでいた。そのことがついには病気が悪化する原因ともなったという<sup>v</sup>。

さて、羅蕙錫は崔承九との関係を両親には内緒にしていた。が、そんなある日、父親から結婚命令が下り、彼女は朝鮮に帰らざるを得なくなった。彼女は仕方なく1915年1月の冬休みを機に朝鮮へ帰っていくが、その場で父から結婚を申し付けられる。しかし、崔承九を思うと父に従

うわけにはいかなかった。すると父から学費を出さないと脅かされたので、やむを得ず朝鮮に留まらざるを得なかった。そうして彼女は1年間教員の仕事をしながら学費を稼いだ。このように既婚者との恋愛はまだ世間一般には許されるものではなかった。そのためか、二人の作品の中で直接相手を思わせるような文章はそう多くない。そんな中で、崔承九は、1914年9月29日付の『情感的生活の要求—（私の更生）—（K.S兄に与える書）』（『学之光』第3号、1914.12）で、羅のことについて次のように触れている。

嗚呼、僕が、僕の系鏈（ママ）——解くことのできない憎らしい、愛する系鏈（ママ）——をどんなに想い、どんなに愛することか！そのことで、どれほど煩悶し、どれほど泣いていることか！僕はこれを考えることで、次のような思考を得ました。「我が系鏈（ママ）はまず、情感的生活をするように」しなければと。

このエッセイは崔承九が友人の羅景錫に宛てたものとされるが、作品の末部あたりではほとんど羅蕙錫に向けて述べられている。引用の「解くことのできない」とは、やはり二人の関係が公にできないことからの悩みであったのだろう。さらに、そうしたことで崔は、死ぬほど「煩悶」し、「泣いて」と、自分の気持ちを率直に打ち明けている。だが、崔は羅にあくまでも「霊的パートナー」としてのアドバイスを忘れない。それはつまり、「情感的生活」の勧めであった。言わばこれは、植民地朝鮮の現実を「知」ではない「情」を持って見てほしいとの気持ちを率直に述べている。

さらに、崔承九の遺作詩ノートには1915年7月に書かれた詩『愛の巢』がある。

愛の巢<sup>vi</sup>

あのまっすぐ逃げていく汽車の窓から  
僕は涙でこの古城の松林を眺めている。  
あの松林は僕の恋人が泊まったところ—nest of love  
恋しい僕の恋人よ！僕の恋人よ！  
籠中にある僕の身体、自由に動けない  
あの雲に—wings of kiss、キスでも送ろうかな

『愛の巢』は、遠くにいる愛する人を思い出して懐かしんでいるところを表している。詩が書かれたのは1915年7月、ちょうど羅が朝鮮に帰ったため、崔と離れ離れになっていた時期に当たる。この詩の読みは二通りできる。一つは、「古城の松林」を破壊された朝鮮王朝に、「恋人」を「祖国」になぞらえていると読み解くことができる。いま一つは、「古城」を滅びた鎌倉幕府に、「恋人」を羅蕙錫にとも考えられる。なぜなら崔は未発表遺作詩、『歩月』（kamakura, 1915. 2）と『夜色長』（kamakura, 1915.10.18）の末尾に、作品を書いた場所を「kamakura」と書き記しているからである。この記録から推測すると、彼はおそらく好んで鎌倉に出向いており、「古城」は鎌倉をさしているとも読める。そしてまだ学生であった彼は「籠中」、つまり鳥籠の中にいる鳥のような不自由さを感じていたのだろう。そのため、愛する恋人にも会いに行けず、その気持ちを込めた「キス」を「雲」にでも乗せて伝えたいと願っているのである。羅を恋慕う彼の真心が垣間見られる一節である。

以上のことから分かるように、羅蕙錫にとって崔承九は、当時流行っていたロマンチックラブを実践しながら霊的な交感を交わしつつ芸術的な価値観も共有できた格好のパートナーであった。そのため、崔の真心をこめて書いた試論等はそのままだ羅蕙錫の作品の下地となって組み込まれ、ある時は返歌として、ある時は思想にまで影響を与え、彼女を奮い

立たせる滋養分と化していたと考えられる。

### 3. <白樺派>と<学之光>、そして羅蕙錫

#### 3.1 武者小路実篤の「自我」思想と崔承九—『お目出度き人』と『自己を革命せよ』を中心に

1910年日本では、社会主義者や無政府主義者らが弾圧を受けた「大逆事件」が起こっており、中でも特に幸徳秋水の死は多くの朝鮮人留学生に衝撃を与えた。文学の領域では、明治文学者たちとは一線を画した若い第二世代が出現していた。彼らは白樺派を結成し、文芸誌・美術雑誌である『白樺』（1910. 4～1923. 8）を刊行して文学や美術を幅広く紹介していた。中心人物には武者小路実篤や志賀直哉、有島武雄らがいて、中でも、武者小路は思想的な中心人物であったと考えられている。個性主義・自由主義を基調とした彼らの言説は新しい思潮をもたらし、朝鮮の留学生たちはそれを貪るように吸収していった。その先鋒に崔承九がいる。

崔が留学し文芸活動をしていた1910年から1915年の間は、白樺派の活動が活発だった時期であるため、『学之光』の誕生においての影響がしばしば指摘される<sup>vi</sup>。白樺派の中からも武者小路実篤の影響は注目すべきところがある。殊に、「個性」「自己」「自我」に関する言説がそうである。江種氏は、武者小路実篤の「個性」等の言説が羅蕙錫の思想に影響したことを解明している<sup>vii</sup>。

ここでは、武者小路の小説『お目出度き人』（『白樺』、1911）と崔承九の試論『自己を革命せよ』（『学之光』、1914）を比較しつつ、「自我」思想に関して分析する。

『お目出度き人』は武者小路の青年時代の代表作であり、また文壇出世作といわれる中編小説である。この作品は主人公が「自分」という

一人称で、少女（女学生）・鶴に対する恋の成り行きを真摯、かつ、率直につづった小説である。学習院を出て「広義の教育家」になりたいと思っている「自分」は、初恋に破れた頃から近所に住む鶴を知っていた。が、いつしか彼女にひかれていき、ついに両親を説きふせ、人を介して三度も求婚する。しかしその度に体よく断られ、その間に鶴は結婚してしまうという内容になっている。

では、本文の中で、「自分」が主張する「自我」に関する一節を引いておく。

鶴に幸せあれ！しかし自分はいくら女に餓えているからと云って、いくら鶴を恋しているからと云って、自分の仕事をすててまで鶴を得ようとは思わない。自分は鶴以上に自我を愛している。いくら淋しくとも自我を犠牲にしてまで鶴を得ようとは思わない。三度の飯を二度にへらしても、如何なる陋屋に住もうとも、鶴と夫婦になりたい。しかし自我を犠牲にしてまで一緒になろうとは思わない。女に餓えて女の力を知り、女の力を知って、自我の力を自分は知ることが出来た。（中略）自分は自我を発展させる為にも鶴を要求するものである<sup>18</sup>。

主人公の「自分」は、「女に餓えている」と単刀直入に切り出して、碌に会話も交わしたことの無い女の子に勝手に恋心を抱く。それから5年ほどの年月を身勝手な片思いに耽るのだが、しかし「自分」は、こうした熱い恋心も「自我」ほど大事ではないと断言する。こうしたところからは、武者小路の自我思想に関する確信に満ちた心構えが垣間見られる。さらに彼は「自我を発展させる為にも鶴を要求する」と付け加え、「自我」か恋人かという二者択一ならば恋人を捨てるよりほかないこと、しかし「自我」の発展のために恋愛も完成すべきであるという思考を見せる。このように武者小路は「自我」の発展、拡大に究極の価値を求めていたのである。白樺派のリーダーであった武者小路は、なによりも



「人間」「自我」を尊んだ。彼が自然主義に反発したのは観照よりも生活そのものを重んじ、客観よりも主観の権威を尊んだからであり、人生への虚無的な絶望や自己憎悪の暗黒に組しなかったのは、もっと光明的で健康な快楽を求めたからであると論じられる。

崔承九は、こうした思想を見習って、試論『自己を革命せよ』を書いた。そこで、「自我」と「自己」は如何なるものかについて細かく項目を立てながら説明し、その重要性を訴えている。

では、本文の中の項目で「自己を見つけよう」の一説を引いておく。

ニーチェ曰く、「私の友よ、お前の感情とお前の思想の背後には、ある力強い主人－気づかぬ哲人－がいる。これの名は自我と言う。これはお前の身体に生きて、お前の身体の中にある。」このいわゆる自我－fulftselfは、感情や思想を配分する権力意思を意味する。私たちはそれぞれ我が自我－ownself-yourself－の力を借りなければならないだろう。直接、戦闘線に出しておかなければいけないだろう。これを立てる前に、先に求めなければならないはずである。喚起しなければならない。私たちはこの自我と長らく没交渉してきている。そのことで一朝に喚起するためには絶叫しなければならない。喚起して、私たちは前と同じく空殻の私たちにならずに内容の充実な私たちにならなければならないだろう。さらに、部分的にならずに、全体にならなければならないだろう。私たちが、自分になった後、肉と感情と良心と本能を統一して権威をふるいつつ、生活の途に進むのである。－生活して行きなさい\*。

崔承九は「自我」を、自分の中の「気づかぬ哲人」と解釈して、「力強い主人」とであると述べる。また、自我は「感情や思想を配分する権力意思」であるにもかかわらず、我々は今までそれと交渉してこなかったことを指摘する。なお「自我」を求め、意識の「喚起」を促す。こうした「自我」は、植民地朝鮮の人々にはもっとも備えるべき資質であり、

なくてはならない意識である。そして、自我が得られた際、つまり「自己を見つけた」場合、皆は「生活」をしていくべきであると締めくくる。

こうした崔承九の「自我思想」は、朝鮮民族を奮い立たせるための、「空殻」から「内容の充実」へと、そして「生活」するという、「前向きさ」と「希望」に満ちた呼びかけを感じさせる。こうしたところはやはり「観照よりも生活そのものを重んじ」た、武者小路の「自我思想」に相通ずるものがある。このように＜白樺派＞の思想を思いきり吸収した崔承九は、その滋養分を恋人の羅蕙錫と惜しみなく分かち合う。

### 3.2 崔承九の「自我」等の主張から羅蕙錫へ—『自己を革命せよ』と『光』を中心に

崔承九は、1915年5月に刊行された『学之光』の第五号に試論『自己を革命せよ（Revolutionize yourself）』を載せ、「自己」の革命のためにはまず、「眼を覚ませ」「立ち上がれ」「光線を浴びろ」「風向を受けろ（思潮の流れを読み—作者注）」「自己探究」「実行に移せ」「十倍の速度を出せ」等の7つの革命項目を列挙し、さらに具体的に説明して訴えかける。

以下は『自己を革命せよ』の一節である。

#### —眼を覚ませ

もう時間はたくさん経過した。一寝ている場合ではない。日が三丈ほど高く昇っていて、窓の外が明るくなっている。裏庭の竹の中には鳥雀が乱喧する。（『自己を革命せよ』、p.63）

#### —起き上がれ

私たちの平和は戦闘の後に存在し、幸福は退治の後にある。戦闘でなければ敗北を。退治できなければ滅亡が待っているだけである。武装して出馬するのも起床後のこと。ましてや私たちは繡枕寶褥で寝ているではないか。（『自己を革命せよ』、p.64）

—光線を浴びろ

水甕で成長した大豆葉がいくら軟らかくても葉緑素はない。幽谷で実を結んだ覆盆子がいくら大きくても甘味はない。日光を浴びなかった大豆葉がいくら珍差の列に参例するとしても同化作用ができなかったものは植物の栄養する本意ではないだろう。線熱を受けなかった覆盆子は祝儀に外観はすばらしくても酸が糖化できなかったため、果実の完全な成熟とは言えない。

—我々は色と熱を受けるために、光線を受ける革命をしなければならなくなった。(『自己を革命せよ』、p.65)

—自己を取り戻せ

我々は自然から空間なく包囲されており、人から連鎖と同様に接触されているため、ほとんど自我を認識できず、自我の存在を忘却するようになった。その間我々はどんな状態にして経過してきたか。—使いたくても使えなかったではないか。我々の肉と霊は束縛された。我々は被征服者になった。我々は奴隷役になった。我々の覚官は動かず、本能は発作できなくなった。良心は残殻のみで、統一性はなくしてしまった。苦痛を感じなくなり、自由の運動を得ず、恥辱を記憶できなくなった。祖先や財産を主張できなくなった。人格の権威は地に墜落し、全く以て蹂躪された。救えない破滅が風前の灯のように臨迫した。(『自己を革命せよ』、p.67)

崔は、『自己を革命せよ』の最初の項目に「眼を覚ませ」を載せ、「眠りから目覚める革命」を提示する。そこで崔は、もう「寝ている場合ではない」と厳しい姿勢で言い放っている。それから次々と、「立ち上がれ」と「光線を浴びろ」、「自己を取り戻せ」と革命を要求する。さらに最後の「自己を取り戻せ」では、我々はいつの間にか「被征服者＝奴隷」に成り下がり、「祖先や財産」も主張できず「権威は地に墜落」したと嘆き、朝鮮独立に向けての行動を促す。そして彼の主張した「自我思想」はそのまま羅蕙錫へと受け継がれる。

羅蕙錫は『女子界』に詩『光』（『女子界』第2号、1918.3）を発表し、

自我を『光』の中で表現してみせる。この『光』から『自己を革命せよ』の影響が見受けられる。

こうした自我思想はそのまま『光』に吹き込まれ表象された。次は『光』の前文である。

光<sup>xi</sup>

すでに彼は私の隣に来て座っているのに私は眼を覚ますことができなかった。

ああ！どうしてそんなに深く眠ってしまったのだろうか

彼がやって来た時に、私は熟睡中だった

彼は心地よい音楽を私の枕元で歌ってくれたのに私は少しも気づかなかった

これほど大切な夜をむだに過ごしてしまったのだ

ああ、もう少し早く彼に気づいてあげたらよかったものを

ああ、光よ！情火を灯せ

いつまでも私の側にいてほしい

ああ、光よ！光よ！摩擦を起こせ

何も気づかずに寝ていた私を起こした以上は

私の身体に火がつくように、熱くしてくれ

それが起こしてくれたお前の使命

起こされた私の役目

あ！光よ！私の側にいる光よ！

冒頭の「彼」は「光」を意味する。そしてこの「光」を崔の言う「光線」と見ることができる。崔は、「色」をつけ「熱」を起こすために「光線」を受ける革命をすべきであると主張していた。したがってこの「光線」は生命力を創り、燃焼させるための媒介体と見ることができる。『光』でも、「火がつくように、熱くしてくれ」と言っており、「光線」の役割は生命力の増進にある。また、崔に「寝ている場合ではない。」

と言われたにもかかわらず、『光』の「私」は「大切な夜をむだに過ごしてしまった」ことに後悔と反省を重ねている。

では、起きた「私」は何に「目覚め」たのだろう。それは言うまでもなく、「自我」に目覚めている。つまり、「光＝私」は人間の内なるものであり、「私」そのものである。こうした自分の他者化によって、「自己」に目覚めた「成熟した自我＝私」はさっそく二回目の小説『回生した孫娘へ』を通して「回生」を試みる。

#### 4. 「更生」と「回生」のナショナリズム

##### —『情感的生活の要求』と『回生した孫娘へ』を中心に

羅蕙錫は1918年9月に小説『回生した孫娘へ』（以下、『孫娘へ』）を『女子界』に発表する。小説は殆どメタファーで表象され、それを細かく読み解く必要がある。あらすじは、孫娘に当たる朝鮮の少女が胃病にかかって床に就いていたのを、ある朝鮮のお婆さんが慈しみ精を尽くして介護した結果、回生を果たす。その際、彼女が食べたものは日本の「カキフライ」ではなく、朝鮮の「カクテキ」である。つまりこの「カクテキ」を食べて「回生」したというのは、朝鮮の国権回復を意味すると考えられる。そして、もう一つ、少女を不憫に思うお婆さんの情感溢れる生活から「回生」が得られたことも見逃してはならない。

一方、すでに崔承九は、1914年発表された『情感的生活の要求—（私の更生）（K.S兄へ与える書）』（以下『情感的生活の要求』、『学之光』、1914.12）で、羅蕙錫の生活に「情感」が足りないことを指摘して助言を惜しまなかった。

では、『情感的生活の要求』と『回生した孫娘へ』の冒頭を読み比べてみよう。

三田の森、品川の海が好い個所であると言えるのも、温情を運んでくれる日光が照耀し、香りを包んで持ってくる微風が徐々に動くときに限ってのことです。（『情感的生活の要求』、p.53）

いろいろな燦爛たるこちょうが飛んで入るようだ。いろいろな色香ばしい花が咲き始めるようだ。（『回生した孫娘へ』、p.106）

崔は日本の「三田の森」がしげって、「品川の海」がきれいなのは、「温情」と「微風」のためであり、その役割を「日光」がやってくれていると述べる。これを受けて羅は、詩『光』で「日光」の役割を肯定した上で、『回生した孫娘へ』でそれにふさわしい情的な生活の実践を表現してみせる。その結果、「蝶」が飛び、「色香ばしい」花が咲き始めているという、もっとも生命力溢れる時空になっている。

つまり、お婆さんの介護という「温情」によって、孫娘に当たる少女が病から回復しており、彼女はその喜びに浸っている。これはまさに、崔の『情感的生活の要求』で羅に要求されたことでもある。羅は元恋人の崔を思い出し、勉強のために介護できなかったことと、情感が足りなかった自分の行動を反省している。

私がいくら抱きたくても抱けない、触りたくても触れない。それで、私が涙を拭いて、"そう心配するな、私がいるじゃないか"と言った時に私は、私の心の中にたまった後悔、有恨、怨哀の積み重なったものを、お前を介護することによって、晴らしてみようと思ったのだ。私の中にある精力と誠心をお前に捧げて見たいと思う熱情が沸いてきたのだ。（『回生した孫娘へ』、p.107）

「私」は、今回の「介護するお婆さん」の役割を果たすことで、「以前、もっとも愛していた人」崔を死なせた悔しさや恨みを晴らそうとしたことを告白している。

なお、崔は『情感的生活の要求』で、情感的生活が出来ない原因を探

り出し、人々が情感に満ちた生活を送ることになると、その時ようやく自分は「更生」できると確信し、それを強く望んでいた。

軸に油のない機械が回転するはずがない。私はこの機械に入れる油を作ることと、漏斗を作ることが一番の急用事だと思います。(中略) ああ！彼らの神経が完全に運転して作用する日が私の更生する日です。こうなると、彼らは、五味を選択することや塩梅を調和すること、肉脯葱散灸や小螺の塩辛鰻の漬物の食べる方法まで通達し、このような食べものだけを要求するようになって、流頭節を大事にし、冬至の赤粥まで炊いて食べるようになる。北楚布韓山苧や羊皮靴子永興紬のズボンまで履くようになる日が、私の二回目の更生の時です。(『情感的生活の要求』、p.56)

崔は、羅をはじめ朝鮮の人々に「情感的生活」が足りないため、「機械＝祖国」が「更生」できないと強く懸念している。機械を動かすためには、「油＝情感」が必要であり、なお「神経」が回らなければならないという。崔は、祖国の独立のためには、「油＝情感」と「漏斗＝神経」が急がれることを主張している。そうすることによって、「私＝祖国」は「更生」という論理である。

羅蕙錫は、1918年9月小説『回生した孫娘へ』を通して崔の言ったことの実践を表現し、そして『光』で「自我」に目覚めた「者」は、後の『回生した孫娘へ』で、「回生」を果たすのである。

では、詩と小説の冒頭を比べてみよう。

彼は心地よい音楽を私の枕元で歌ってくれたのに私は少しも気づかなかった。(『光』、p.105)

はやく大きくなりなさい。お前のそのほっそりした腰でピアノの前に座って、そう、はやく弾きなさい、お前のその甲高い音のバイオリンを。ああ！私の身体が仙女になったようだ。私の前で天使が付

き添っているようだ。いろいろな燦爛たるこちようが飛んで入るようだ。いろいろな色香ばしい花が咲き始めるようだ。私はどうしても可哀想で目を当てられない、お前のそのぶるぶる震えながら、力に尽くして弾いている姿がどんなに嬉しいか分からない。（『回生した孫娘へ』、p.106）

『光』の冒頭での「彼＝光」は「私」の傍で「音楽を歌って」いる。『回生した孫娘へ』では、「ピアノ」と「バイオリン」で音楽を演奏しており、同じ雰囲気をかもし出している。また、両作品で「私」は、その音楽を「心地よ」く聴いており、『光』の「私」は深い眠りから起きて何かの活動を準備している様子を見せ、『孫娘へ』の「私」もやはり希望に満ちていて、明るい前途を暗示してくれる。

前述したように、『光』で、「私」を起こした「光」は「私」と同一人格と見ることができる。つまり、「私」と「光」は同時に「自我」であることが読み取れる。そして、その自我に目覚めた私は、その力の使い道を模索する。

では、以下の引用から「孫娘」と「お婆さん」の関係を見てみよう。

ああ！幸運だ。お前が病から快復されたことで、私が再び生き返える。私は口が綻びるように笑いが出て、肩が落ちてしまうほど踊りたくなる。（『回生した孫娘へ』、p.108）

「私」は「孫娘」の快復を通して「再び生き返る」のである。つまり、「孫娘」は「私」の分身であると言える。そして、回生した「私」は、「祖国」を意味しており、小説の中では独立を果たしていると読むことができる。羅は、『孫娘へ』の孫娘を通して、「回生」を果たしており、それは崔の「更生」でもある。このように羅蕙錫は、1918年あたりからナショナリストへの変貌を見せつつ、それを3・1独立万歳運動で



行動に移していく。

## 5. おわりに

本稿では、フェミニストとして出発した羅蕙錫が、1919年3月、3・1独立万歳運動を機にナショナリストに変貌したことに焦点を当てて考察した。その結果、そうした羅蕙錫の変貌には、恋人の崔承九の役割が大きかったことが判明した。二人は近代の恋愛術であるロマンチックラブを通じて、霊性的交感を分かち合いつつ思想を深めており、交際を通じて崔承九は、植民地にされた祖国を救うために「情感的な生活」が必要であることを言及しており、そうした崔の要求は、羅蕙錫にナショナリストへと変貌するきっかけを与えた。

1910年代初頭の日本では、文芸誌『白樺』が白樺派によって刊行されており、彼らの主張する「個人」や「自我」思想は多くの文学者たちの支持を得ていた。そこで、朝鮮の留学生たちは、＜白樺派＞の論理を議論し合い、貪るように吸収していった。その代表人物が武者小路実篤であった。武者小路は小説『お目出度き人』を通じて「自我」のことを述べ、大きな反響を呼んだ。そこで、留学生のリーダー的存在であった崔承九と留学生らは、＜白樺派＞に倣い、『学之光』を刊行して新しい思想の紹介に専念した。そしてそうした崔承九の経験は、後に留学してきた羅蕙錫と恋人関係になったことで彼女に影響を与えた。

崔承九は羅蕙錫の思想を理解する唯一のよきパートナーであった。そして彼は、民族解放のためには「情」を生かした生活が重要であることをアドバイスし、そうした意見を二編の試論を通じて伝えている。羅は、1916年2月、崔承九が病気で亡くなった後、時代の変化と共に彼の要求に答えることになる。それは1917年に書かれた『雑感』2編と、詩『光』と小説『再生した孫娘へ』を通じて表象される。つまり『光』で

は「自我」の目覚め、『回生した孫娘へ』では、「自我の活動」を通じて「回生」した祖国をえがいてみせる。崔から『情感的生活』を要求されてから4年が経ってからの返答であった。

羅蕙錫は、朝鮮に帰国してから＜3・1独立万歳運動＞の企画に参加するなど、深く活動に携わっていた。フェミニストからナショナリストへの変貌であった。しかしそのことで警察に検挙され、刑務所に入れられたが、5ヵ月後釈放された。

## 注

- i このことは、『毎日新報』（1913. 4. 1）の「才子才媛」欄に載っている。
- ii 「一家教育」、『皇城新聞』、1908年12月23日
- iii イ・サンギョン（2009）、『わたしは人間の生き方をしたい』、ハングル社、pp.95～113
- iv 崔承万（1985）、『僕の回顧録』、p. 9
- v 崔承万（1985）、前掲載書、p. 9
- vi 1915年7月12日作成、遺作詩
- vii 主に、江種満子（2007. 3）、「1910年代の日韓文学の交点—＜白樺＞・＜青鞥＞と羅蕙錫—」がある。
- viii 江種満子（2007. 3）前掲載書参照
- ix 武者小路実篤（1987）、『武者小路実篤全集』、p.82
- x 崔承九（1915）、「自己を革命せよ」、『学之光』、p.68
- xi 羅蕙錫（2000）、『羅蕙錫全集』、p.105